

李義山の無題詩

鈴 木 虎 雄

李義山の詩は難解といはれ、字句甚だ綺麗なるも、その眞意は何處に在るや判斷に苦しむもの往往之あり。かの

「錦瑟」の如き古來問題とせらる。張采田は其の「玉谿生年譜會箋」^(注一)に於て此詩を大中十二年の作とし、何焯義門の

説に賛同して之を「自ラ傷ム」作となせり。他の諸家は之を「悼亡」即ち義山が其妻王氏王茂元の女の逝去を悼む作となす。同じく悼亡の作となす者も、詩句の解釋に於ては雑多なり。此詩もし悼亡の作ならば一定の年時と事實とにより、その作意もほぼ之を推定するを得べし。予は此詩の悼亡の作たるを疑ふものなり。此詩のこと末尾に述べ。「無題」の詩は之に異なり、齊しくみな艶情綺語の作なり、其意の那邊に在るやは最も推測に苦しむ。韓偓の「香奩集」^(注二)は本來艶情の作なり、而して之に對し一一之を時事に附會

李義山の無題詩（鈴木）

して諷刺の作なりと爲すものあり。義山の無題詩亦た宛も之と同一の方法を以て一一時事を引きて之を諷刺化せんとするもの稀少ならず。今予の義山の無題詩に對するや、之を時事に關係あり、又は諷刺の意ありとは全然看做さざるものにして、詩中の字句を字句のままに觀んとするものなり。而も此の客觀的解釋亦甚だ容易ならず、義山の表現は竟に古人の謂はゆる「晦澁」を免るること能はず。

無題の詩を單に戀愛の情を述べしものと假定するとき、その戀愛の對象となるものは何者なるや。私見によれば、少女・貴女・倡女の三者是なり。又三者の中、其の孰れなるやは不明なるも、其人とは幼より相知り、同じく遊戯せしことあり、文書を往復せしことあり、會を約束せしことあり、中間別人に妨害せられしことも、而して其人は後には他に嫁す。以下義山の詩によつて之を觀察すべし。本稿の主旨は詩の意義を求むるに在るも、尋常の典故・字義、諸家の注に明なるものには言及せず。

無題 一云陽城

白道繁^{ケケクワイ}回入暮霞^イ 白道繁^{ケケクワイ}回して暮霞^イに入る

斑^{シマ}驪^リ嘶^シ斷^ツ七^七香^香車

斑^{シマ}驪^リ嘶^シ斷^ツす七^七香^香車

春^春風^風自^自共^共何^何人^人一^一笑

春^春風^風自^自ら何^何人^人と共^共に笑^笑ふ

枉^枉破^破陽^陽城^城十^十萬^萬家

枉^枉破^破す陽^陽城^城の十^十萬^萬家

此詩は倡家の女と別るるをいふ。第一句は別時の景、第

二句は、男は馬に騎り、女は車に駕するをいふ、第三第四

は其人との別後を想像す、枉破の句は即ち迷^{ハス}陽^陽城^城の意。

無題

近知名阿^ア侯

近^{ちか}知^{なる}る 名^なは阿^ア侯

住處小^小江流

住^すする處^{ところ}に 小^こ江^江流^る

腰細不^不勝^勝舞

腰^{こし}細^こくして舞^まふに勝^かへず

眉長唯是愁

眉^{まゆ}長^{なが}くして唯^{ただ}に是^これ愁^{しみ}ふ

黃金堪^堪作^作屋

黃^{きん}金^金 屋^やを作^{つく}るにた^たへたり

何^何不^不作^作重^重樓

何^{なに}ぞ 重^{おも}樓^{たか}を作^{つく}らざる

此詩は少女の美愛すべきをいふ。第一句の阿侯の典故は

古樂府の洛陽女兒名莫愁及び十六生^シ兒^子字阿^ア侯^侯に本づき、

兒といふは男か女か不明なるも、李賀長吉の綠水詞・夜來

樂・春懷引等及び義山の用例に依れば、阿侯とは倡家の女

をさす。然れども「重樓深下」詩の莫愁、「月姊曾逢」詩

の傾城、共に良家の女をさすを見れば、必ずしも之を倡女と断ずべからざるに似たり。詩意は分明なり。

無題二首起句昨夜星辰、及聞道閨門、

昨^あ夜^や星^{せい}辰^{しん}昨^あ夜^や風

昨^あ夜^やの星^{せい}辰^{しん} 昨^あ夜^やの風

畫^え樓^{ろう}西^{せい}畔^{ぱん}桂^{けい}堂^{たう}東

畫^え樓^{ろう}の西^{せい}畔^{ぱん} 桂^{けい}堂^{たう}の東

身^み無^な綵^{さい}鳳^{ほう}雙^{そう}飛^ひ翼^{よく}

身^みには綵^{さい}鳳^{ほう} 雙^{そう}飛^ひの翼^{よく}なく

心^こ有^あ靈^{れい}犀^{さい}一^{いつ}點^{てん}通^{つう}

心^こには靈^{れい}犀^{さい} 一^{いつ}點^{てん}の通^{つう}ずるあり

隔^{かく}座^ざ送^{そう}鉤^{こう}春^{しゅん}酒^{しゆ}暖

座^ざを隔^{かく}てて鉤^{こう}を送^{そう}りて春^{しゅん}酒^{しゆ}暖

分^{ぶん}曹^{そう}射^{しゃ}覆^{ふく}蠟^{ろう}燈^{とう}紅

曹^{そう}を分^{ぶん}ち覆^{ふく}を射^{しゃ}て蠟^{ろう}燈^{とう}紅^{こう}なり

嗟^さ余^よ聽^き鼓^こ應^{おう}官^{くわん}去^{きょ}

嗟^さ余^よ鼓^こを聽^きく應^{おう}に官^{くわん}去^{きょ}すべし

走^{そう}馬^ま蘭^{らん}臺^{たい}類^{るい}斷^{たん}蓬^{ほう}

馬^まを蘭^{らん}臺^{たい}に走^{そう}らす、斷^{たん}蓬^{ほう}に類

二

聞^き道^{だう}閨^{けい}門^{もん}萼^{がく}綠^{りよく}華^か

聞^きくならく閨^{けい}門^{もん}の萼^{がく}綠^{りよく}華^か

昔^{せき}年^{ねん}相^{さう}望^{ぼう}抵^{てい}天^{てん}涯^げ

昔^{せき}年^{ねん}相^{さう}望^{ぼう}みて天^{てん}涯^げに抵^{てい}す

豈^あ知^ち一^{いつ}夜^や秦^{しん}樓^{ろう}客

豈^あに知らんや一^{いつ}夜^や秦^{しん}樓^{ろう}の客

偷看吳王苑内花

偷^ウみ見る吳王苑内の花を

並に貴女に對する愛をいふ。第一首の一・二句は時と場處とをいひ、二・三は心境、四・五は遊戲、七・八は官務に由りて去らざるを得ざるをいふ。その何の官に在りし時なるやは不明、(注三)朱注は蘭臺の語によりて義山秘書省校書郎たりし時の作となす。

第二首の一・二句は會て仙女を相望せしをいふ。秦樓客は自己をいひ、吳苑花は貴女をさす。吳苑花に西施、即ち古代の美女、單なる美女と見らるべきも、他詩より推察して貴女をさすかとおもはる。藩鎮の女も亦たかく言ひうべきも、禁苑の女、公主の類をさすに非るか。

無題四首 起句、來是空言、颯颯東風、含情春晚晚、何處哀箏、

來是空言去絶踪 來るとは是れ空言、去りて踪^{あと}を

絶つ

月斜樓上五更鐘 月は斜なり樓上五更の鐘に

夢爲三遠別啼難喚 夢に遠別を爲す啼きて喚び難く
書被三催成墨未濃 書は成るを催さる墨未だ濃かな

李義山の無題詩(鈴木)

蠟照半籠金翡翠

らざるに
蠟^{ラフ}照半籠^{セウマカハ}む金翡翠^{キンヒスキ}を

麝熏微度繡芙蓉

麝^{ジャ}熏^{グン}微^{スオ}度^チ繡芙蓉^{シウフワヨウ}に

劉郎已恨蓬山遠

劉郎^{リウリョウ}已に恨む蓬山の遠きを

更隔蓬山一萬重

更に隔つ蓬山一萬重

二

颯颯東風細雨來

颯^{サツ}颯たる東風に細雨來る

芙蓉塘外有輕雷

芙蓉塘外 輕雷あり

金蟾蠲鎖燒香入

金蟾^{キンセン}鎖^{クマ}を齧みて燒香入り

玉虎牽絲汲井回

玉虎^{ギョクコ}絲^シを牽き井を汲みて回る

賈氏親簾韓掾少

賈氏^カ簾^{アサ}を親ふ韓掾^{カンケン}の少きに

宓妃留枕魏王才

宓妃^{フキヒ}枕^{マク}を留む魏王^{エイオウ}の才あるに

春心莫共花爭發

春心^{ハルココロ}花と共に發^{ハツ}くを争ふこと莫^な

れ

一寸相思一寸灰

一寸の相思、一寸灰なり

三

含情春晚晚 情を含みて春晚晚

暫虎日、當作漸見夜闌干 漸く見る夜、闌干たるを

樓響將_レ登怯 樓響き 登らんとして怯に

簾烘欲_レ過難 簾烘して過らんと欲する難し

多羞釵_上燕 多く羞づ釵上の燕に

眞愧鏡_中鸞 眞に愧づ鏡中の鸞に

歸去橫_塘晚虎日、當作曉、 歸り去る横塘の曉

華_星送_寶鞍_一 華星、寶鞍を送る

四

何處哀_一箏隨_二急_一管_一 何の處か哀箏、急管に隨ふ

櫻_花永_巷垂_楊岸 櫻花の永巷、垂楊の岸

東_家老_一女嫁不_レ售 東家の老女 嫁售れず

白_日當_天三_月半 白日天に當る三月の半

深_陽公_主年_十四 深陽公主 年十四

清_明暖_後同_牆看 清明暖後に牆を同じくして看

る

歸_來展_轉到_二五_一更_一 歸來展轉して五更に到る

梁_間燕_一子聞_二長_一嘆_一 梁間の燕子 長嘆を聞く

並に貴女に關す、而して第四首は其の年少なるものをい

ふ。

第一首は女と密會を約して女來らざるをいふ。一はその

事、二は其の時、三・四は自己、而してその情、四は女に

會期を約せし書の、墨色の濃からざりにうながされしを

いふ、如何に急促なりしやを見る。五・六は女居を想像す、

金翡翠は女室の屏又は障の飾、繡芙蓉は、杜甫の句に屏開

金孔雀、褥隱繡芙蓉、とあり、七・八は自己の女と遠く隔

たるをいふ、劉郎とは自己を比す。

第二首は相思の竟に空望なるをいふ。一・二の句は時景

をのべ、その夏節に屬するをいふ。三・四、三は句の構造

上曖昧の點あり、そは入字回字の辨じがたきこと是なり、

諸家は入・回の主語を、省略されたる「人」字なりとなす、

之を人なりとせば、女の侍婢をさすものならん、侍婢の解

をとれば、(侍婢)燒_レ香_入 (侍婢) 汲_レ井_回 と訓ずべ

し。しかし三・四の二句は

金_一蟾_蠶燒_レ香_入

玉_一虎_牽汲_レ井_回

とも訓ぜらるべし。燒香入の入の主語は、燒香なるも、間

接には入るとは人が入るるなり。回を(めぐる)と訓ずる

ときは回の主語は明に玉虎なり。義山當時の香爐の制詳ならざるも、「海録瑣事」によれば、金蟾は鎖の飾にして、玉虎は轆轤なりといへり。之によれば香爐に鎖を口にくはへたる金蟾がさがり居るなり、而してその香爐の本體に燒香が入れられをるなり。更に又想像すれば、香爐其物が金蟾にして、それが上蓋と下體とに分れ、鎖はその上蓋と下體とをつなぐ用に充つるものにて長く、その部分が蓋と體とにはさまれるものなるやも知れざるなり。朱本卷上促漏の睡鴨香爐換夕熏の句參照。香爐若し睡鴨を體とせば、それに鎖をくはへたる金蟾がかけられをるなり。玉虎の句は、井の架上に轆轤あり、それに玉虎の飾りがつけられ、その轆轤がつるべの絲繩をひき、井水を汲みつつ回轉するをいふ。五・六の句の賈氏・宓妃は女をさし、韓掾・魏王は自己をさす。而して此の二句は女の情を想像してのべしものにして、事實をいふにあらず。七・八の句は自ら諭すの辭なり、其の意にいふ、「春氣旺なれば花發く、我が春心は愈々旺なれば愈々相就く能はず、燃えずして死灰となる」(故にいたづらに相思ふことなかれ)と。

李義山の無題詩(鈴木)

第三首は、夜、女を訪はんと欲して勇氣なく、遠く其の居を望み、曉近く空しく歸るをいふ。第二句、「暫見」の暫字は宜しく漸に作るべし、諸本皆誤る。一・二句は春夜女室に近づき待ちて夜深に至るをいふ。三・四は女の居室に入るの勇なきをいふ。樓は前引の「畫樓西畔」とある樓なるべし。五・六は女姿に對する羞しさをいふ。七・八は曉に近く空しく歸るをいふ。「横塘晚」の晚は曉字の誤なるべし、二字は古書互に誤るもの多し。華星は啓明の類、寶鞍は自己騎る所の馬。

第四首は、字の如く讀むときは明に禁苑内の女子に對する作なり。一・二句は春景をいふ。三の老女は陪客として用ゐしもの、春三月半に至るも尙嫁し得ざる女あるをいふ。五の深陽公主年十四とは即ち主にして我が意中の人、七・八は牆邊同じく春景を見、歸來眠らず天明に至り、我が長嘆を聞くもの梁間の燕子あるのみなるをいふ。

無題起句、照梁初有情

照梁初有情

照梁 初めより情あり

出水舊知名

出水 舊名を知らる

裙^{シロ} 叔^{シロ} 芙^{シロ} 蓉^{シロ} 小^{シロ} 裙^{シロ} 叔^{シロ} 芙^{シロ} 蓉^{シロ} 小^{シロ} に

釵^{シロ} 茸^{シロ} 翡翠^{シロ} 輕^{シロ} 釵^{シロ} 茸^{シロ} 翡翠^{シロ} 輕^{シロ} し

錦^{シロ} 長^{シロ} 書^{シロ} 鄭^{シロ} 重^{シロ} 錦^{シロ} 長^{シロ} くして書^{シロ}、鄭^{シロ} 重^{シロ}

眉^{シロ} 細^{シロ} 恨^{シロ} 分^{シロ} 明^{シロ} 眉^{シロ} 細^{シロ} くして恨^{シロ}、分^{シロ} 明^{シロ}

莫^{シロ} 近^{シロ} 彈^{シロ} 碁^{シロ} 局^{シロ} 彈^{シロ} 碁^{シロ} の局^{シロ} に近^{シロ} づくこと莫^{シロ} れ

中^{シロ} 心^{シロ} 最^{シロ} 不^{シロ} 平^{シロ} 中^{シロ} 心^{シロ} 最^{シロ} も平^{シロ} ならず

此詩は女より書を受けしをいふ。一・二句は女の美をいふ。兩句につき朱注其他は何遜の詩句を擧ぐるも、一は宋

玉の神女賦の其始來也、耀乎若白日初出照屋梁を、

二は曹植の洛神賦の灼若芙蕖出綠波を引くべし。三・

四の句は女の装の美をいふ、裙叔は婦人の蔽膝（前垂れ）、

芙蓉は其の繡飾、釵茸は釵子の飾りの毛の垂れたるもの、

翡翠は翡翠の鳥の毛をいふ。五・六は女よりの書と其の表

情。七・八は之に對する自己の心情。彈は獨り中心不平の

譬喩たるに止まらず、來書の意恐らく彈碁のことよせて

誘ひ來りしものなるべし。

蝶三首第一起句初來小苑中、第二長眉畫了、第三壽陽公主、

初來小苑中 初めて小苑の中に来り

稍^{シロ} 與^{シロ} 瑣^{シロ} 關^{シロ} 通^{シロ}

遠^{シロ} 恐^{シロ} 芳^{シロ} 塵^{シロ} 斷^{シロ}

輕^{シロ} 憂^{シロ} 艷^{シロ} 雪^{シロ} 融^{シロ}

只^{シロ} 知^{シロ} 防^{シロ} 皓^{シロ} 露^{シロ}

不^{シロ} 覺^{シロ} 逆^{シロ} 尖^{シロ} 風^{シロ}

回^{シロ} 首^{シロ} 雙^{シロ} 飛^{シロ} 燕^{シロ}

乘^{シロ} 時^{シロ} 入^{シロ} 綺^{シロ} 櫳^{シロ}

二

長^{シロ} 眉^{シロ} 畫^{シロ} 了^{シロ} 簾^{シロ} 開^{シロ}

碧^{シロ} 玉^{シロ} 行^{シロ} 收^{シロ} 白^{シロ} 玉^{シロ} 臺^{シロ}

爲^{シロ} 問^{シロ} 翠^{シロ} 釵^{シロ} 釵^{シロ} 上^{シロ} 鳳^{シロ}

不^{シロ} 知^{シロ} 香^{シロ} 頸^{シロ} 爲^{シロ} 誰^{シロ} 回^{シロ}

長眉畫き了りて簾開く 碧玉行々收む白玉の臺を 爲めに問ふ翠釵釵上の鳳に 知らず香頸、誰がためにか回らすやと

三

壽^{シロ} 陽^{シロ} 公^{シロ} 主^{シロ} 嫁^{シロ} 時^{シロ} 粧^{シロ}

八^{シロ} 字^{シロ} 宮^{シロ} 眉^{シロ} 捧^{シロ} 額^{シロ} 黃^{シロ}

見^{シロ} 我^{シロ} 伴^{シロ} 羞^{シロ} 頻^{シロ} 照^{シロ} 影^{シロ}

壽陽公主嫁時の粧 八字の宮眉 額黄を捧ぐ 我を見て伴羞、頻に影を照らす

稍^{シロ} 與^{シロ} 瑣^{シロ} 關^{シロ} と通^{シロ}ず

遠^{シロ} は恐^{シロ} る芳^{シロ} 塵^{シロ} の斷^{シロ} えんことを

輕^{シロ} は憂^{シロ} ふ艷^{シロ} 雪^{シロ} の融^{シロ} けんことを

只^{シロ} だ知^{シロ} る皓^{シロ} 露^{シロ} を防^{シロ} ぐを

不^{シロ} 覺^{シロ} らず 尖^{シロ} 風^{シロ} に逆^{シロ} ふを

回^{シロ} 首^{シロ} を回^{シロ} らせば雙^{シロ} 飛^{シロ} の燕^{シロ}

時^{シロ} に乘^{シロ} じて綺^{シロ} 櫳^{シロ} に入^{シロ} る

不知身屬_レ治_レ遊郎_二 知らず身は治遊郎に屬するを

此の三首は、第一首は蝶なるも、第二・第三は蝶と關係なし。無題詩に入るべきものなり。第一は蝶といふも、實は暗に自己を比す。三首共に蓋し貴族の女に對していふものなるべし。

第一首、此詩は蝶、瑣闌に入らんとして逆風に妨げられ意を得ず、雙燕の綺櫺に入るを羨むをいふ。寄託の意推して知るべし。

第二首、此詩は貴人の女、盛粧成りしをち、さて其人の意中は果して何人に在りての爲めに頭を回らすや、と疑ふ意を敍す（女の意、我に向て注がれんことを願ふなり）。碧玉は侍婢をさす。白玉臺は即ち玉鏡臺の義。

第三首、此詩は粧成りし女が意を我に向て屬するをいふ。公主といひ、宮眉といふだけにては、女が貴人の女たるを定むるに足らず。何となればその粧は平人にも之を學びうければなり。ただ末句の治遊郎は自己をさすものにして、「我が身の治遊郎たるを知らずして、我を見て伴羞し意を屬するこそ意地らしけれ」といへるところより、此女

李義山の無題詩（鈴木）

の貴家の女ならんことを推察するなり。

義山の相手の貴女は何人なるか知る由なきも前に引きたる豈知一夜秦樓客、偷看吳王苑內花、といふ句あり。又、「破鏡」と題する作あり、曰く、玉匣清光不復持、菱花散亂月輪虧、秦臺一照山雞後、便是孤鸞罷舞時、と。一・二句は破鏡をいふ。三・四は女復た鏡前に舞ふを得ざるをいふ。山雞・孤鸞は女を比す。秦臺は秦樓そのもの或は樓中の鏡臺の意ならん。山雞の故事は「異苑」に、孤鸞の故事は范泰の鸞鳥詩序に見ゆ。本事に於ける孤鸞は雄なれども、詩にて之を雌として用ゐたりと見る。義山の貴女に於けるや、中間者の妨害により斷絶せしめられたるなり。

無題二首第一首起句八歲偷照鏡、第二首幽人不倦賞、

八歲偷照鏡 八歲偷に鏡を照らす

長眉已能畫 長眉已に能く畫く

十歲去踏青 十歲 去て青を踏む

芙蓉作裙衩 芙蓉を裙衩となす

十二學彈箏 十二 彈箏を學ぶ

銀一甲不ニ會卸一 銀甲ギンカウ 會カフて卸オチさず

十四藏ニ六親一 十四 六親リクシンに藏ザツす

懸知猶未レ嫁 懸ケルカに知ルる猶未ナだ嫁セざるを

十五泣ニ春一風一 十五 春風ハルカゼに泣ク

背レ面鞞一韞下 面オモを背セく 鞞シヤクの韞モト下

二

幽一人不レ倦レ賞 幽人は賞カウに倦タまず

秋一暑貫ニ招一邀一 秋暑アキナツに招セツボツ邀セらるるを賞カウふ

竹碧轉悵一望 竹碧チキヒキにして轉悵ウラタ望ス

池清尤寂一寥 池清チキヨウくして尤モトも寂寥シヤウ

露一花終裏一濕 露花ロウカ 終ハシに裏ウラ濕シツす

風一蝶強嬌一饒 風蝶フウテフ 強シいて嬌饒ケウガウたり

此地如携一手 此地ココ如ニ手ヲ携ヒへば

兼レ君不ニ自聊一 君キミを兼ヒねて自ミツカら聊レツせざらんや

第一首、女の八歳より十五歳に至る嬌小可憐の状を敘す。

詩意は明白なり。第七句の六親には二解あり、一は「周禮」

地官大司徒の注、一は「漢書」禮樂志の如淳注是なり。

第二首、は秋暑の時、女より招かれしことを敘す。末尾

の七・八は女と共に手を携ふるを得ば、兩者共は無聊ならざるべきをいふ、不自聊とは豈不自聊の意。

無題起句紫府仙人

紫一府仙人號一寶一燈一 紫府シヤフの仙人シヤン、寶燈ホウトウと號カクす

雲一漿未レ飲結成レ氷 雲漿ウンシヤウ未ナだ飲ムまざるに結ムスびて氷

となる

如何雪一月交レ光夜 如何イカニぞ雪ユキ月光ツキノミツを交マシふる夜

更在三瑤一臺十二層一 更ナラニに瑤臺テウタイ十二層ジニソウに在アるや

此詩は女の獨一人にて天上にあり、寂寥なるべきをいふ。

第一句の「號寶燈」は意晦なるも、女の佛の如くなるをい

へるものならん。

無題起句相見時難

相見時難別亦難 相見シヤウケンの時難トキガタシく別ワカるる亦難ナし

東一風無力百一花殘 東風トウフウ力チカラなく百ヒャク花殘ハナノコトす

春蠶到レ死絲方盡 春蠶シュンサ死シに到キて絲イト方ハ盡ス

蠟一炬成レ灰淚始乾 蠟炬ロウキョ灰ハイとなりて淚ナミダ始ハジめて乾ク

曉一鏡但愁雲一鬢改 曉鏡キョウキョウ但タ愁ウレシ雲クモ鬢カミ改カまるを

夜一吟應レ覺月一光寒 夜吟ヤイン應オホへし月ツキ光ミツノ寒サムきを

夜吟應に覺ゆべし月光の寒きを

蓬山此去無多路一蓬山此を去る多路なし

青鳥殷勤爲探看 青鳥殷勤爲めに探り看よ

此詩は女 の 消息 を 待つ を いふ。三・四は自己をいひ、五・

六は女をいふ。七・八は即ち仙山に住する女より青鳥の使をつかはさんことを望むなり。貴女なるべし。

碧城三首第一首起句、碧城十二、第二對影聞聲、第三七

夕來時、

碧城十二一曲闌干 碧城十二曲の闌干

犀辟塵埃玉辟寒 犀は塵埃を辟け玉は寒を辟く

閨苑有書多附鶴 閨苑、書あり多く鶴を附す

女牀無樹不棲鸞 女牀、樹として鸞を棲ましめ

ざるはなし

星沈海底當窗見 星、海底に沈みて窓に當て見

雨過河源隔座看 雨、河源を過ぎて座を隔てて

看る

若是曉珠明又定 若し是れ曉珠、明又た定まら

ば

一生長對水一晶盤 一生長く對せむ水晶盤に

二

對影聞聲已可憐

影に對し聲を聞く已に憐むべし

玉池荷葉正田田

不逢簫史休回首

莫見洪厓又拍肩

紫鳳放嬌銜楚佩

赤鱗狂舞潑湘絃

鄂君悵望舟中夜

繡被焚香獨自眠

三

七夕來時先有期

洞房簾箔至今垂

玉輪願免初生魄

鐵網珊瑚未育枝

檢與神方教駐景

玉池の荷葉正に田田

簫史に逢はず首を回らずを休めよ

見るなし洪厓、又肩を拍つを

紫鳳、嬌を放にして楚佩を銜み

赤鱗、狂舞して湘絃を潑す

し

玉池の荷葉正に田田

簫史に逢はず首を回らずを休めよ

見るなし洪厓、又肩を拍つを

紫鳳、嬌を放にして楚佩を銜み

赤鱗、狂舞して湘絃を潑す

鄂君悵望す舟中の夜

繡被香を焚きて獨り自ら眠る

七夕來るとき先ず期あり

洞房の簾箔今に至るも垂る

玉輪には願免初めて魄を生ず

鐵網には珊瑚未だ枝あらず

神方を檢與して景を駐めしめ

鐵網には珊瑚未だ枝あらず

神方を檢與して景を駐めしめ

收_レ將鳳_一紙_一寫_レ相思_一 鳳紙を收め將て相思を寫す

武_一皇內_一傳分_一明在 武皇の内傳に分明に在り

莫_レ道人_一間總_レ不_レ知 道ふ莫れ人間總て知らずと

三首共に女を仙女として見たり。

第一首は女の將に他人に嫁せんとする直前に之を望見し

て自ら煩悶するをいふ。一・二は女の居、三・四によれば、

女より消息ありしなり。五・六の星沈・雨過は望見の難さ

をいふ。七の曉珠明又定の五字に對しては、諸家文字を解

きてその意を解かず、私見にては、「明朝に至らば女の歸

屬決定せん」との意と爲す。是に於てか第八句の結あり。

第二首は、女の他人に歸屬せしをいふ。一・二は女とそ

の地とをいふ。三・四の簫史・洪厓は自己を比す。五・六

は女の已嫁後の癡態を想像す。七・八は鄂君を以て自己を

比し、その無聊をいふ。

第三首は、甚だ解しがたし、臆説をのべん。一は七夕に

牛女の如く會すべき約あり。二、然るに女、房を閉ちて來

らず。三・四、時已に十六日に至る。而して鐵網中未だ珊

瑚の枝を收むる能はず。五・六、相思を寫し、神方を檢す。

七・八、此等（五・六）の事皆漢武内傳の中にあり、女之
を知らずとは言はさじ。

促漏起句促漏遙鐘

促漏漏遙鐘動靜聞

報章重疊香一作字難レ分

舞鸞鏡匣收殘黛

睡鴨香爐換夕熏

歸去定知還向月

夢來何處更爲雲

南塘漸暖蒲堪結

兩兩鴛鴦護水紋

促漏 遙鐘 動靜聞ゆ

報章 重疊 字分ち難し

舞鸞の鏡匣 殘黛を收め

睡鴨の香爐 夕熏を換ふ

歸り去て定めて知る還月に向

ふを

夢み來て何の處か更に雲とな

る

南塘漸く暖に蒲結ぶにたへた

り 兩兩鴛鴦 水紋を護す

此詩、女と期會して遇はず、鴛鴦を見て之を羨むをいふ。

第二句の杏は一本に字に作る、「字」に従ふ。一二は待ち

て夜深に至り、女よりの返書屢々なれども其の字判讀しが

たくして時刻を誤れるに非るやを疑ふ。動靜の動は鐘に、

静は漏に、ついでいふ。三・四は女の寢室を想像す。五・六は上述の繼續、但、二句中の歸去定知は自己につきていひ、爲雲は女につきていふ。誠みに句中の動詞の主語を補はば、(我) 歸去定知(女) 還向月、(我) 夢來何處(女) 更爲雲、なるべし。七・八は自己の歸去時の景物に接し、その境を羨む。促漏二字は起句の首字を取りしに止まり、實質上「無題」の詩なり。

無題二首第一首起句鳳尾香羅、第二首重幃深下、

鳳尾香羅薄幾重

鳳尾の香羅 薄 幾重

碧文圓頂夜深縫

碧文 圓頂 夜深に縫ふ

扇裁明月魄羞難掩

扇、月魄を裁して羞、掩ひ難

車走雷聲語未通

車、雷聲を走らせて語、未だ

通ぜず

曾是寂寥金爐盡

曾是是れ寂寥 金爐盡く

斷無消息石榴紅

斷えて消息なく石榴紅なり

斑駁只繫垂楊岸

斑駁只た繫ぐ 垂楊の岸

何處西南任好風統鈿任作待、 何の處よりか西南

李義山の無題詩(鈴木)

二

好風を待つ

重幃深下莫愁堂

重幃深く下す 莫愁の堂

臥後清宵細細長

臥後 清宵 細細長し

神女生涯原是夢

神女の生涯 原是れ夢

小姑居處本無郎

小姑の居處 本郎なし

風波不信菱枝弱

風波 信ぜず菱枝の弱きを

月露誰教桂葉香

月露誰か桂葉をして香からし

めん

直道相思無益

直道ふ相思ふも了に益なしと

未妨惆悵是清狂

未だ妨げず惆悵是れ清狂なる

並に貴女に對する思をのぶ。

第一首の一より四までは女の側をいひ、五より八までは我が方をいふ。一・二は女が衣を裁縫するをいふ、三・四は女の扇・車に對する我が意中をいふ。扇に對して羞ぢ、車聲を聞きては言語の通ぜざるを恨む。五は曾て春夜女を待ちて燈火盡くるに至りしをいふ。六は(然るに)女より

消息なくして石榴花の紅なるに至りしをいふ。予は諸家の注、石榴を石榴裙と見るには従はず。七・八は専ら我についていふ、馬を垂楊の岸につなぎ、好風西南に向て吹かんことを願ふ。西南の風といふは女の居が作者の位置東北に在りしたためならん。八の句の「任好風」は任のままにて通じうるも、「統籤」に待に作るといへば「待」字簡明なり、待に從ふ。

第二首は、詩中必しも其の貴女たるの證なし、然れども恐らく此時は女已に他に嫁すること決し、再會の期なからんとおもひし時に作りしものならんと考ふるが故に之を同じ相思の貴女とみるなり。詩中の莫愁・神女・小姑は同一人なり、一より四まで獨身臥房の女をいふ。五・六は問題なるが、蓋し五は女今は十分成長せしをいひ、六は月中の桂葉、我が露を用て霑したしとの意を寓せしものならん。七・八、然れども其人、他に嫁すること已に決したれば相思ふも益なし、惆悵清狂の身となるも妨げなし、(實は大に妨げあるも失望の極の逆説なり)といふなり。

房中曲起句薔薇泣幽素

薔薇泣幽素

薔薇幽素に泣く

翠帶花錢小

翠帶花錢小なり

嬌郎癡若雲

嬌郎癡、雲の若し

抱日西簾曉

日を抱きて西簾曉く

枕是龍宮石

枕は是れ龍宮の石

割得秋波色

割き得たり秋波の色を

玉簾失柔膚

玉簾柔膚を失す

但見蒙羅碧

但だ見る蒙羅の碧なるを

憶得前年春

憶ひ得たり前年の春

未語含悲辛

未だ語らずして悲辛を含む

歸來已不見

歸り來れば已に見えず

錦瑟長於人

錦瑟は人よりも長かりき

今日日澗底松

今日は澗底の松

明日山頭鶯

明日は山頭の鶯

愁到天池翻

愁到れば天池翻る

相看不相識

相看るも相識らず

此詩は會て幽會せし女あり、其人今は他に嫁す、その往時を憶ひて賦したるものなり。

一・二は女の衣服につきていふ、薔薇・花鏡は蓋し衣帯の紋様なり、幽素は白露。二・三は會して天明に至りしをいふ、嬌郎は自己をさす。五より八までは枕簾を見て往時を憶ふ、曰く、龍宮の石の枕は會て女の秋波の色を割取す、玉簾亦會て柔膚を横へしに、今之を失し、ただ簾を蒙被せる羅帳の碧なるを見る。九より十二までは更に續きて往時を憶ふ、曰く、往年の春には面を見しばかり未だ語を交へずして悲しき、錦瑟の長さよりも脊たけ低くかりしに、今や我歸り來れば彼女は已に見えず（彼女は他に嫁せり）歸來の二句は倒裝。十三より十六は現在の心境、曰く、我は今日潤底の松の如く節操を守るも、明日は山頭の槩（黄槩の汁は苦し）の如く苦心を抱く、愁到れば胸中の波瀾は天池の翻るが如し、何となれば、彼女は今では相看るも見て知らぬが如くなればなり。

注家或は此詩を以て悼亡の詩となす。之に依らば相看不相識の句を如何に解せんとするか、「相看」とは尙看るを得る人に對する辭なり、以て悼亡の作となすべからず。

無題起句萬里風波一葉舟

李義山の無題詩（鈴木）

此の詩は蜀中の事を言ひ、艷詩に非ること前人已に之を言へり。

楚宮二首第一首起句十二峰前、第二首月姊會逢、

十二峰前落照微

十二峰の前 落照微なり

高唐宮暗坐迷歸

高唐宮暗くして坐に歸るに迷ふ

朝雲暮雨長相接

朝雲 暮雨 長へに相接す

猶自君王恨見稀

猶自ら君王 見るの稀なるを恨む

二

月姊會逢下彩蟾

月姊會て逢ふ 彩蟾を下りし

傾城消息隔重簾

傾城の消息 重簾を隔つ

已聞三佩響知腰細

已に佩響を聞きて 腰の細き

更辨三絃聲覺指纖

更に絃聲を辨じて 指の纖き

暮雨自歸山悄悄

暮雨自ら歸りて 山悄悄

秋河不動夜厭厭

秋河動かず 夜、厭厭

暮雨自歸山悄悄

暮雨自ら歸りて 山悄悄

秋河不_レ動夜厭厭

秋河動かず 夜、厭厭

王昌且在牆東一住 王昌且つ牆東に在りて住す

未ニ必金堂得レ免レ嫌 未だ必しも金堂に嫌を免るる

を得ず

第一首は詩意、題とかなふ。第二首は「無題」詩に屬す

べきものなり。第二首の題を馮浩本には「水上閑話舊事」となす。かかる祕事を何人と閑話せんとするか、馮本の題

は疑ふべし、やはり無題詩に入るべきものと信ず。

第二首は、貴女にして、之と屢々相見し當時の作なるべし。而し其人は昨夜星辰昨夜風の詩に於て送鉤・射覆の遊

戯を共にせし貴女と同一人なるべし。

第二首の一・二は會て逢ひ、今簾を隔て消息なきをいふ。

三・四は女姿を想像す。五・六は相會する能はずして夜深に及ぶをいふ。七・八は王昌ともいふべき自己が牆東に住してゐては、女との關係につき貴族の家の嫌疑を免れ得ざるをいふ。」

一句の月姊とは月の靈をさして女に比す、彩蟾は月その物をさす。二句の傾城は女をさす、七の王昌は自己を比す。

自己を比す。

中元作起句絳節飄飄、

絳節飄飄 瓊宮 一作空國來

絳節飄飄 國を空しくし

中元朝拜上清一回

中元 朝に上清を拜して回る

羊權須得金條脫

羊權 須く得べし金の條脫を

溫嶠終虛玉鏡臺

溫嶠終に虚し 玉の鏡臺

會省驚眠聞雨過

會て省す眠を驚かして雨の過ぐるを聞きしを

不知迷路爲花開

知らず路に迷ひしは花の開くが爲めなるを

有娥未抵瀛洲遠

有娥未だ瀛洲の遠きに抵せず

青雀如何鳩鳥媒

青雀は如何に鳩鳥の媒に

此詩は中元に女と會すべくして、他人の妨害により會するを得ず、失望せしことをのぶ。一・二は女が天に朝して歸回せしをいふ。中元（陰曆七月十五日）には仙人等皆天上

の上清宮の天帝に朝する例なり。作者は女を仙人とみなす、「宮國來」の宮字、一に空に作る、空字に従ふ。絳はあび

茶色、節は旗じるしの如きもの、仙女の行列にならぶるものなり、空國來とは下界の國をからにして天上に來るをい

ふ、かくて上清宮を朝拜してかへるなり。三・四の羊權・温嶠は自己を比す、女の金條脱（劍）を要するも得る能はず、玉鏡臺徒に存す。五・六、雨聲を聞きて眠を驚かされ、桃源の花深きを以て路迷ひ源に達するを得ず。七・八、その道遠きに非るに、妨害に由り目的に達する能はざるをいふ。有娥は氏の名、二美女ありしといふ、相手の女の居處をいふ。瀛洲は三神山の一、海上にありといはるる仙境、青雀は西王母の使をなす鳥、鳩鳥はその羽毛に猛毒ある鳥、兩句の意に曰く、「女の居處、瀛洲ほど遠からざるに、そこに達する能はざるは、媒人に鳩鳥をたのみしが爲めなり」と。「青雀（の媒）は鳩鳥の媒に何如に」といふは、婉曲に言ひしものにて、「青雀の媒を使ひしならばよかりしに、鳩鳥の媒を用ゐしがあしかりし」との意なり。

深宮起句金殿銷香

金殿銷香鼓吹作香銷閉綺櫳
 玉壺傳點咽銅龍

狂瀾不_レ惜蘿_一陰薄
 狂瀾_{キヤウラン} 蘿陰_{ラウイン}の薄_{ウサ}きを惜_{オホ}まず

李義山の無題詩（鈴木）

清露偏知桂葉濃

清露_{ヒトヘ} 偏_{ヒトヘ}に知る桂葉に濃_{ヒトヤカ}なるを

斑竹嶺邊無_レ限淚

斑竹嶺邊_{ハンチクレイ} 無限_{ヒトヘ}の淚

景陽宮裏及_レ時鐘

景陽宮裏_{ケイヤウキョウ} 及_{キヤウ}時の鐘

豈知爲_レ雨爲_レ雲處

豈_{ヒトヘ}に知らんや雨となり雲となる處

只有_レ三高唐十二峰

只_{ヒトヘ}だ高唐_{タカトウ}の十二峰あるを

此詩は前に引ける「重幃深下」の作と類似の心境をのべしものならん。意中の貴女、他人の有となるを妬み且つ羨むなり。第一句の「銷香」は一に「香銷」に作る、香銷に従ふ。一・二の句は女の居室に夜の深けゆくをいふ。三・四は「重幃深下」の詩の五・六句、風波不信菱枝弱、月露誰教桂葉香、と對照して考ふるとき、狂瀾の句は男、之を遇する粗暴ならんことを恐れ、己、之を遇せば恩露濃に之を露すべきをいふ。菱枝・桂葉といひ、蘿陰・桂葉といふは、蓋し眼前見る所、又は時物の連想により之を使用せしものならむ。五・六は、かかる境なれば女、無限の涙をそそぎ曉時に及ぶべきをいふ。七・八は、則ち我方より彼等

の境地を妬羨するをいふなり。

哀箏起句延頸全同鶴

延頸全同鶴

頸を延ぶるは全く鶴に同じく

柔腸素怯猿

柔腸素 猿より怯なり

湘波無限淚

湘波 限りなきの淚

蜀魄有餘冤

蜀魄 餘冤あり

輕幃長無道

輕幃 長へに道なく

哀箏不出門

哀箏 門を出てず

何由問香炷

何に由りてか香炷を問はむ

翠幕自黃昏

翠幕 自ら黃昏なり

此詩は深閨の貴女を思ふことをいふ。前六句、女につき
ていふ。尾二句、兼ねて自己をいふ。

一・二はいふ、彼女は我（作者）を待ち待ちて頸をさし
のべること鶴と同じく、腸柔にしてちぎれ易きこと猿より
も臆病なり。三・四、彼女の涙は湘水の波の如く限りなく、
ほととぎすに比して以上の冤恨をいなく。五・六、車帷を
飛ばして外出するには道なく、哀れなる箏曲をかなくてつづ
門外に出づることなし。七・八、たそがれになりゆく空に

は翠幕が垂れられ今日も暮れゆく、我（作者）は彼女が就
寝のために香をくゆらすかなど問ひたす由もない。

最後に「錦瑟」の詩につき私見をのべん。

錦瑟起句錦瑟無端

錦瑟無端五十絃朱注當爲十五絃、

錦瑟無端無く五十

一絃一柱思華年

絃

莊生曉夢迷蝴蝶

一絃一柱に 華年を思ふ
莊生が曉夢 蝴蝶迷ひ

望帝春心託杜鵑

望帝の春心 杜鵑に託す

滄海月明珠有淚

滄海月明かに 珠に淚有り

藍田日暖玉生煙

藍田日暖かに 玉、煙を生ず

此情可待成追憶

此の情、追憶を成すを待つ可

只是當時已惘然

けんや
只だ是れ當時も己に惘然たり

此詩に關して予は注家諸賢と議論することを欲せず、又、
其餘地を有せざるが故に單に私見をのぶ。私見によれば、
此詩は悼亡の作に非ずして追憶の作なり。哀箏・房中曲、

其他年少の貴女につきて詠したる諸篇と同性質にして、即ち無題詩に入るべきものなり。詩題の錦瑟と、房中曲の錦瑟長於人の句と關係あらんとは注家も已に言ふ所なり、ただ注家は悼亡説の下に之をいふ、予は然らず、錦瑟長於人の句は房中曲の條に於て言へる如く、女が身のたけ尙錦瑟よりも短かかりしといふ體姿をいひしに止まるものとなすなり。この「錦瑟」詩には華年とあれば、其女がそれよりも成長したる時にして、恐らく二十歳前後彼女の已嫁後を追憶せるなり。詩中の五十絃につきて作者行年五十の時の追憶となすものあり(注四)、^(注四)屈復、予は取らず。已嫁後若干年のことにて十分なり。

義山の生卒年時は明かならず。朱鶴齡は西紀七九五又は七九六に生れ、八五九までを算し、其後は考ふべからずとなす。享年六十四又は六十五なり。程夢星によれば、七九六に生れ八六九までを算し、其後考ふべからずとなす。享年七十以上。馮浩は八一三に生れ八五八に卒す、五十ならずして没すとなす。之によれば享年四十六。張采田は八一二に生れ八五八の二月以後幾もあらず卒すとなす、享年四

李義山の無題詩（鈴木）

十七、なり。此の如く享年に七十以上、六十四五、四十七、四十六、の四種あり、予は未だ義山の生卒につき仔細に之を検せざるを以て其の孰れが正しきやを知らず。ただ義山が纔に弱冠に及びて令狐楚に謁して文を學び、八一八大中十二年八五八二月以後鄭州に還り幾もなく卒したりといふを基礎として考ふれば、彼の享年は六十歳前後なることは窺ふべし。作者行年五十にして往時を追憶しうべきも、絃數と年齢とは蓋し無關係ならん。若しその關係あるを欲せば、朱説の十五絃に従ひ、女の年少時を連想するとなすに如かざるべし。

さて詩意をのべん。

一・二は瑟の一絃をかき鳴らさるる毎に女の華年時を憶ふをいふ。無端の二字は次句の思字に接す。三・四は自己の心境をいふ。五・六は女の心情と容姿の美とをいふ。珠有涙とは房中曲の未語含悲辛と同意ならん。七・八は今、往時を追憶するを待たず、往時（女の華年の時）よりして已に自己の心は黯然たりしをいふ、「重幃深下」の七律の、直道相思了無益、未妨惆悵是清狂、と同一の心境なるべし。

以上予は義山の無題詩、及び題は異なるも其の性質は無題詩なるべき者について管見をのべたり。なほ此には掲げざる別題の詩についても無題詩として見るべきもの尠からず。義山詩を読む者は予の無題詩觀を一説として役立てらるるならば望外の幸なり。○丙申九月十四日稿、かなづかひ原文の、

註

(註1) 張采田、玉谿生年譜會箋、四卷、丁巳(民國六年)劉氏求恕齋刊本。

(註2) 清・震鈞、香齋集發微一卷、附、韓承旨年譜一卷、宣統辛亥(三年)刊本。震氏自序に云ふ、『香齋集は有唐の離騷九歌なり。後人の善く讀まざりしよりして、古人の命意晦し。後人の古人を尙論する能はざるよりして、古人の綱常を扶植するの詞、且つ變じて罪を名教に得るの作となれり。……其の辭を夷考するに、一として忠君愛國の忱、恨を無窮に纏する者に非ざるは無し。……然れども唐末より今に至るまで、千歲に近し。絶えて一人の表して之を出だすもの無く、徒らに耿耿たる孤忠をして、天下に白はれず、世の閱する者、遂に疑雨集と量を等しくし翹を齊しうせしむるは、異とすべきかな。』また韓致堯(すなはち韓偓)の序ののちに附した震氏の識語に言ふ、『一卷の香齋、全べて舊君故國の思

に屬す。』あるひは『詩に六義あり、後代は賦多くして比興少なし。香齋集は則ち純乎として比興なり。最も三百篇に近き所以』等といふ。震氏のいふ比興とは、すなはち寓意・寄託の義であつて、この書の全卷、その意を説き、附録の年譜によつて、これを補足してある。

(註3) 清・朱鶴齡、李義山詩集三卷、順治十六年序刊本。朱鶴齡の箋注は清初に成り、その後これに刪補を加へた程夢星の「重訂李義山集箋注」と題する乾隆十一年の刊本があり、また朱彝尊、何焯(何義門)、紀昀(曉嵐)らの批點を加へた刊本(同治九年翰墨園刊本)がある。義山の詩の注解には、なお姚培謙の箋を附した「李義山詩集」十六卷(乾隆四年刊本)馮浩の撰した「李義山全集箋注」(そのうち玉谿生詩箋注三卷、乾隆四十五年刊本)などがあつて、世に行なはれてゐる。森槐南博士の「李義山詩講義」(東京、大正三年)は主として馮浩の説に本づく講義の筆記である。

(註4) 清の屈復、「玉溪生詩意」八卷には、乾隆四年の自序があり、「李義山詩箋注」と題する石印本(民國六年、上海)が行なはれてゐる。

右鈴木博士はその参考せられた注解の類について詳しく記されなかつたので、今印刷にあたり、博士の許可をえ、版本等について數條の注を補記して讀者の参考に供する。

小川環樹記。